



地域に貢献し、地域で学ぶ活動
教養C群サービスラーニング科目

2021年度 シチズンシップ・スタディーズ 活動報告会 資料集

立命館大学サービスラーニングセンター
衣笠 有心館1階

Tel: 075-465-1952 / Fax: 075-465-1982

B K C アドセナリオ1階

Tel: 077-561-5910 / Fax: 077-561-5912

O I C A棟1階AN事務室

Tel: 072-665-2195 / Fax: 072-665-2059

(窓口時間：平日 10:00～17:00)

サービスラーニングセンターE-mail: ritsvc@st.ritsumei.ac.jp

サービスラーニングセンターHP: <http://www.ritsumei.ac.jp/slc/>

MEMO

目次

はじめに

シチズンシップ・スタディーズとは	P.2
活動報告会 次第	P.3
次第【プレゼンセッション時間割】	P.4

発表資料

時代祭応援プロジェクト	P.6~7
衣笠キャンパス地域連携課3プログラム	
・絶滅寸前種フジバカマの栽培とまちづくりチーム	P.8~9
・きぬがさ農園における野菜栽培、腐葉土づくり、花で憩えるスペース作り	
～衣笠キャンパス究論北側館花壇および等持院南駐輪場内花壇の整備～チーム	P.10~11
京北WSプロジェクトA班	P.12~13
京北WSプロジェクトB班	P.14~15
京北WSプロジェクトC班	P.16~17
京北WSプロジェクトD班	P.18~19
草津宿魅力発信プロジェクト	P.20~21
草津ブランドPR企画実施プロジェクトin草津ブランド市	P.22~23
学生・若者が動きだす“まちづくり講座”をプロデュース!	P.24~25
茨木みずとわプロジェクトA	P.26~27
茨木みずとわプロジェクトB	P.28~29
FP茨木 Ritsプロジェクト	P.30~31
国際理解教育外国人サポーター派遣事業	P.32~33
発達障がい・不登校・貧困世帯の子どもの支援事業	P.34~35

報告会に寄せて（担当教員からのメッセージ）

自分の根っこを掘りあてる機会に（山口 洋典先生）	P.36
京北WS P@シチスタ始動（景井 充先生）	P.37
これからの人生のために（小辻 寿規先生）	P.38
試行錯誤の1年目（秋吉 恵先生）	P.39

シチズンシップ・スタディーズとは

ーボランティア活動を通して地域で学ぼう！ー

「シチズンシップ・スタディーズ」は、2020年度まで開講してきた「シチズンシップ・スタディーズ」での経験を基盤に、学生実態に合わせて2020年度教養改革で、半期科目として設置した立命館大学サービスラーニングセンターが開講する正課科目です（課外活動ではありません）。この授業は、受講生がボランティア活動を通じて地域に貢献しつつ、地域社会の一員としての自覚と能力を育み、専門知識の応用的な理解を深めることを目標としています。

ボランティア活動は、大学のキャンパス内だけでは得られない、かけがえのない経験を受講生にもたらししてくれます。さらに、地域で活動を行うことは、自らが暮らす地域をこれまでとは違った視点で捉えることを可能にするだけでなく、大学で学ぶ知をいかに地域で活かせるかを学ぶ契機となります。ボランティアプログラムの開発・運営にあたっては、大学やサービスラーニングセンターが地域や海外等も含めた行政、公的機関、NPO、地域組織などと協定（覚書）を締結した上で実施します。ボランティア活動の期間は、数日程度の短期で行うものから、数ヶ月程度の長期で行うものまでさまざまです。受講生が自身の興味や関心に沿って、参加するボランティア活動を選択することができます。

ボランティア活動の魅力を感じながら、大学で学ぶ知に生きた風を呼び込んでください。

ーボランティアだけど奉仕活動じゃない。授業だけど講義じゃない。

それがサービスラーニング！ー

「シチズンシップ・スタディーズ」は、「奉仕活動」ではなく「ボランティア教育」プログラムです。ボランティア教育とは、体験的学習の一形態で、ボランティア活動を中心に事前・事後の学習（研修・振り返り）を組み、明確な教育目的に基づいて行われる教育プログラムです。よって、ボランティア活動を通じて、他者や地域（コミュニティ）の役に立つだけでなく、そこから学習効果を得られるよう設計されます。この点が、純粋な「奉仕活動」との違いです。単にボランティア活動に参加すれば、単位が認定されるというわけではありません！ボランティア活動を通して何を学びたいのか、確かな問題意識をもって取り組むことが重要です。

また、このような教育手法は、欧米ではサービスラーニング(service-learning)またはコミュニティサービスラーニング(community service-learning)と呼ばれています。

2021年度実施プロジェクト・プログラム一覧

2021年度は、下記の地域団体にご協力いただき、69名の受講生を受け入れていただきました。

キャンパス	クラス名	プロジェクト・プログラム名	受入団体名	担当教員
衣笠	GA	時代祭応援プロジェクト	平安講社	山口 洋典
		衣笠キャンパス地域連携3プログラム(※注)	衣笠キャンパス地域連携課	
	GB	京北WSプロジェクト	京北WSプロジェクト	景井 充
BKC	G1	草津宿魅力発信プロジェクト	草津市	小辻 寿規
		草津ブランドPR企画実施プロジェクトIN草津ブランド市 学生・若者が動き出す”まちづくり講座”をプロデュース!		
OIC	GV	茨木みずとわプロジェクト	(一社)みずとわ	秋吉 恵
		FP茨木Ritsプロジェクト	フードパントリー茨木	
		国際理解教育外国人サポーター派遣事業 発達障がい・不登校・貧困世帯の子どもの支援事業	(公財)大阪府国際交流財団 (特活)み・らいず2	

※注. 衣笠キャンパス地域連携3プログラム：①きぬがさ農園における野菜栽培、腐葉土づくり、②花で憩えるスペース作り～衣笠キャンパス究論北側館花壇および等持院南駐輪場内花壇の整備～、③絶滅寸前種フジバカマの栽培とまちづくり

活動報告会 次第

【開催日時】 2022年1月15日（土） 13:00～16:10

【開催場所】 オンライン（Zoom）

【スケジュール】

時間	プログラム
13:00～13:15	オープニング
13:15～13:35	第1セッション
13:40～14:00	第2セッション
14:05～14:25	第3セッション
14:25～14:35	休憩
14:35～14:55	第4セッション
15:00～15:20	第5セッション
15:25～15:50	受入先講評（各団体3分程度）
15:50～16:05	教員講評
16:05～16:10	事務連絡（レポート提出等について）

活動報告会 次第

【プレゼンセッション時間割】

チーム コード	プレゼンチーム名	セッション 1	セッション 2	セッション 3	セッション 4	セッション 5	
GA_1	時代祭応援 プロジェクト	発表	発表	発表	発表	発表	
GA_2	衣笠キャンパス 地域連携 3プログラム	絶滅寸前種フジ バカマの栽培と まちづくり チーム	発表	×	発表	×	発表
		きめがさ農園に おける野菜栽培、 腐葉土づくり チーム、花で憩 えるスペース作 りチーム	×	発表	×	発表	×
GB_1	京北WSプロジェクトA	発表	×	発表	発表	×	
GB_2	京北WSプロジェクトB	発表	発表	×	発表	発表	
GB_3	京北WSプロジェクトC	×	発表	発表	発表	発表	
GB_4	京北WSプロジェクトD	発表	発表	発表	×	発表	
G1_1	草津宿魅力発信 プロジェクト	×	発表	×	発表	×	
G1_2	草津ブランドPR企画 実施プロジェクトIN 草津ブランド市	発表	発表	発表	発表	発表	
G1_3	学生・若者が動き出す "まちづくり講座"を プロデュース！	発表	×	発表	×	発表	
GV_1	茨木みずとわ プロジェクトA	発表	発表	発表	発表	発表	
GV_2	茨木みずとわ プロジェクトB	発表	発表	発表	発表	発表	
GV_3	FP茨木Rits プロジェクト	発表	発表	発表	発表	発表	
GV_4	国際理解教育外国人 サポーター派遣事業	発表	×	発表	×	×	
GV_5	発達障がい・不登校・貧困世 帯の子どもの支援事業	発表	発表	発表	発表	発表	

※当日の状況により、一部変更する場合があります。

MEMO

2021 年度時代祭応援プロジェクト

池田、宇都宮、岡部、小川、柏山、萱嶋、村尾、森田、渡邊

1. プロジェクト概要

1-A. 時代祭応援プロジェクトとは

- ・時代祭の役員の年齢層が高く、衣装管理や練習準備などの各種作業が負担
→祭の維持・存続のため、学生が時代祭の運営や準備に協力
- ・地域活動を見学、体験し、地域の実情や課題を理解する

1-B. 受入団体について

- ・時代祭の運営を担う市民団体「平安講社」の一つである平安講社第八社
- ・大正 10 年（1921 年）に組織され、2021 年に結成 100 周年を迎えた

2. 時代祭とは

- ・毎年 10 月 22 日に平安神宮で行われる京都三大祭の一つ
- ・時代装束姿の京都市民約 2000 人が 20 の時代列に分かれ、時代をさかのぼり行進
- ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2 年続けて行列巡行は中止
→時代祭の新入隊士が不足する恐れ

3. 活動スケジュール

	プロジェクト活動	地域活動	自主企画活動
9 月	ガイダンス		
10 月	オリエンテーション 時代祭	防災授業 防災会議	
11 月	衣装調査	消防分団と夜回り マチピト cafe	防災連絡網作成 衣装着付け、畳み方動画作成 パンフレット作成
12 月		太田さん取材 防災授業	防災連絡網作成 衣装着付け、畳み方動画作成 パンフレット・Google フォーム作成
1 月	活動報告会	防災まち歩き	防災連絡網サポート 衣装着付け、畳み方動画完成 チラシ・Google フォーム完成

2. プロジェクト活動

1. オリエンテーション（10/3）
2. 時代祭（10/22）
3. 衣装調査（11/14）

3. 自主企画活動

1. 目標設定

成果目標	行為目標
地域活動がデジタル化する。 ・時代祭：隊士が参加、継続しやすくなる。 ・地域：朱八地域内で防災災害情報を広範囲に共有できるようになる。	動画:着付け・保存方法を動画で伝え、隊士保護者の負担軽減に貢献する。 Web 化:八社の申請受理手続きを手伝う。 地域:朱八地域で緊急連絡網を作る。

2-A. 隊士衣装着付け、畳み方動画作成

背景：時代祭に関わる皆様の衣装の取り扱いに関する負担が大きいことが課題であった。

目的：着付け、片付けに関するアプローチ方法の提案。

内容：衣装着付け、片付けの施策動画作成

結果：隊士、保護者の衣装の取り扱いのサポートとして実際に次年度運用を予定。

2-B. 反省と学び

反省	学び
<ul style="list-style-type: none">・事前準備不足・お力添えいただく皆様への企画意図の周知の徹底を行う	<ul style="list-style-type: none">・地域の方々の思いを汲んだ企画の提案の難しさ。

3-A. 隊士入隊申請の Google フォームの導入

背景：従来の紙の申請では記入漏れが見られ、手作業での管理の負担を軽減したい。

また、地域活動への参加経験が少ない層への入隊アプローチを試みる。

目的：隊士データの詳細化（期限や様式を整える）、隊士獲得の新ルート開拓

内容：①中学校にチラシを配布する。②八社に Google フォームを使用した申請方法を導入する。

現状：一月中にチラシ・Google フォーム完成予定。

3-B. 反省と学び

反省	学び
<ul style="list-style-type: none">・役員さんとのコミュニケーション不足	<ul style="list-style-type: none">・残すべき伝統がある中でこれからの 100 年に必要な新しいものを融合させていくことの難しさ。

4-A. LINE のオープンチャット作成

背景：住民の方にも行き届く、個人情報が出ない情報共有システムの導入。

目的：災害時の連絡網、地域住民と相互のコミュニケーションを可能にする。

内容：①オープンチャットについての講習会を行う。②デジタル面での疑問点の解消。

結果：「オープンチャット導入」への不安を減らしていただくことが出来、徐々に範囲を広げて導入していただく展望となった。

4-B. 反省と学び

反省	学び
<ul style="list-style-type: none">・講習会の準備不足・学生の立ち位置認識の不足	<ul style="list-style-type: none">・相手の立場を考慮した伝え方(資料や言葉の表現)の必要性・新たなシステム導入に向けて必要な段取りの綿密さ

5. まとめ

・この授業を通して学んだこと

活動に参加する意義→活動現場での新しい出会いにより活動の輪が広がる。

企画提案→学生と地域の人々との対話の重要性。

衣笠キャンパス地域連携3プログラム フジバカマ班

担当：上田倫久・大城浩矢・大谷拓也

田中里奈・中邑陸人

1. はじめに～フジバカマの保全活動について～
2. 目標
3. 主な活動内容
4. おわりに～活動を通して学んだこと～

1. はじめに～フジバカマの保全活動について～

フジバカマとは秋の七草のひとつです。日本では古来より親しまれてきましたが、近年は都市化に伴いその数を減らし、京都府はフジバカマの日本固有種を絶滅寸前種に指定しています。現在は様々な形でフジバカマの保全活動が行われています。

私たちは立命館大学地域連携課と嵐電沿線フジバカマプロジェクトをはじめとした地域の皆様が取り組まれておられる保全活動の輪に加えていただき、保全活動に取り組んできました。

2. 目標

- i. フジバカマが広く知られた状態になること
- ii. SDGs を身近な存在にすること
- iii. 地域社会とのかかわりの中で、学びを得ること

3. 主な活動内容

○水やり(8月1日～11月29日)

学生で交代しながら、概ね毎日フジバカマに水やりを行いました。また、水やりの報告をInstagramで行い広報も行いました。

○嵐電各駅にフジバカマの設置(2021年10月2日)

地域の方々が集まり、嵐電沿線上にフジバカマを設置しました。設置後、地域住民の方々が見学に来てくださりました。また、アサギマダラも飛来しました。

○大場さんによる学校案内・今後の方針相談など(2021年10月5日)

等持院・立命館大学衣笠キャンパス前駅に設置してあるフジバカマの水やり・観察・今後の活動のアイデア出し、究論館に地植えしてあるフジバカマの観察を行いました。その後は、大場さんに、学内施設の説明などをしていただきました。

- 嵐電各駅に設置したフジバカマの撤収作業(2021年10月11日)
嵐電各駅に設置したフジバカマの撤収作業、水やり、今後の相談などを行いました。
- 大場さんによる過去のフジバカマ保全活動の説明(2021年10月11日)
立命館大学地域連携課の大場茂生さまのご説明により、1年間のフジバカマ保全活動の流れを知ることが出来ました。
- 入浴剤・広報紙作成(10月30日～11月23日)
学生にフジバカマとその歴史、SDGsを身近に感じてもらうことを目的として、フジバカマを原料とした入浴剤と広報紙を作成しました。
- フジバカマ草木染 第1・2回目(第1回：11月6日・第2回目：11月13日)
染師の山本晃様よりフジバカマの葉を染料として行う草木染をご教授いただきました。
- フジバカマにおい袋づくり 第3回目(11月27日)
フジバカマで染めた布を使用して、フジバカマの葉を入れたにおい袋を作成しました。
- 入浴剤・広報紙設置のお願い(12月10日)
フジバカマの葉を使用して作成した入浴剤とフジバカマの保全活動の広報紙を設置するため、立命館生活協同組合「ブックセンターふらっと」店長の篠原紀子さまに設置許可をいただきました。
- 入浴剤・広報紙をブックセンターふらっとに設置(12月15日)
設置許可をいただき、12月15日より設置を開始しました。一日あたり5個程度をもらっていただきました。

4. おわりに～活動を通して学んだこと～

- SDGsについて自らの体験をもとに考え、行動することが出来ました。
保全活動によってSDGs目標15のターゲット「生物多様性損失の阻止」に取り組みました。また、フジバカマの染物・におい袋の作成、入浴剤の作成などの物を再生させる活動によって、「持続可能性」について深く考えることが出来ました。
- 地域とのつながり
ボランティアに参加する以前は、地域の皆様が受け入れてくださるのか不安でしたが、日々の活動に真摯に取り組む中で、地域連携課を初めとした大学職員の皆様、嵐電沿線フジバカマプロジェクトや地域住民の皆様と共に活動することが出来、結果として地域の輪に溶け込んだことを実感しました。

衣笠キャンパス地域連携3プログラム 花壇・農園班

担当：川部倫大・園田美咲・山本駿介

花壇

○概要

1. 雑草等が生い茂り、放置された状態にあった究論館前の花壇を整備することで、大学院生がそれを見て癒されるような空間を作る。
2. 等持院地区には花屋さんがなく、高齢者が遠方まで供花を買いに行かねばならないこと、また子どもの居場所が少ないという背景から、花壇整備を行いこれらの課題に対応する。

○活動目標

- ① 学生・教職員にとって、癒しとなる空間をキャンパス内に作る
- ② コミュニティの活性化

○活動内容

- ・ 等持院南駐輪場
バラ植え（品種：カイ）※特別な意味あり
- ・ 学而館東側
腐葉土敷き
種まき（キンセンカ、ストック）
- ・ 充光館横
土づくり（馬糞、天ぷら糟、肥料、パーライト）
種まき（ジャーマンアイリス）
- ・ 究論館前
草刈り
石取り除き
土づくり
種まき（スイートピー）

○学んだこと

- ・ 農業の大変さ
← 草刈り・土の掘り返しには体力・根気が必要
- ・ 農業知識
… 肥料の種類、花の植え方
- ・ 花を見る人が多い、花が人を繋ぐ（駐輪場に植えたバラの話など）
- ・ 共同で作業することの楽しさ
= 継続して活動することが望める

○活動成果

目標①について

→これからも達成に向けて取り組む

目標②について

- ・ 花が地域住民と大学をつなぐ（等持院南駐車場）
- ・ 映像学部の学生との関わり（充光館横）

- ・大学院生の癒しの場に（究論館）
- 花を通じて大学が地域の人と繋がることのできた。
目標②の達成

農園

○概要

キャンパス内で発生した大量の落ち葉を、お金をかけて捨てているという現状を知り、それを堆肥化して有効活用する。それにあたり、きぬがさ農園で野菜作りを行うことで、落ち葉を廃棄せず、堆肥として活用していくといった循環サイクルを構築していく。

○活動目標

きぬがさ農園が、地域と学生の大きな交流の場になる

○活動内容

- ・農業（堆肥を使う）
ハウレンソウの間引き・植え替え
コットンの綿取り
農作物の収穫（サツマイモ、ハウレンソウ、大根）、収穫量の計量、食堂へ提供
大根の蔓と葉っぱの仕分け
- ・企画イベント
案山子作り
松ぼっくり拾い、松ぼっくりの色塗り
クリスマスリース作り
幼稚園児の芋ほり体験
- ・開拓
← 現在は使用していないチャペルの周辺を、農地として切り開く

○活動成果

- ・近所のおばあさんとのかかわり
- ・実際に学生団体「Kreis」に加入

きぬがさ農園が、地域と学生の大きな交流の場になる
→これからもっと大きな交流の場になるよう活動を継続

○学んだこと

- ・大学で発生する無駄をなくす
- ・地域の人との繋がり、居場所づくり
- ・大学の他機関・他団体との繋がり
- ・農園の人々の温かさ

京北ワークショッププロジェクトAチーム 報告会資料

長谷川・前澤・山内

【キーワード】

里山の過疎化対策、里山活用、循環型社会、サステナブル

1) はじめに

「地方と都市のつながり」をテーマとし、京北町と都市という離れた地域にどのような関係性があるのか考えていく。その関わりを知ることで京北町に親しみを持ち自分たちと身近な存在、無関係ではない存在であることについて学ぶことを目的とする。

2) 京北町の産業から見る都市とのつながり

京北町は森林面積が 9 割を占め、平安京造営期から林業が盛んで、長らく木材の供給源であった。しかし高度経済成長期に外国産木材の輸入が増加し、構造材としての国産材の需要が低下した。一方で、産出される北山杉はインテリア素材として高く評価されており、バブル期では極めて高値で取引されていた。しかしバブル崩壊後価格は低迷し、林業従事者の減少なども相まって、京北町の林業は厳しい状況下にある。

林業の衰退は都市とも無縁ではなく、林業の多くは里山で行われている。里山は資源であるとともに景観維持や水源涵養、保水においても大きな役割を担う。特に後者は、水害や土壌の侵食・崩壊の抑止のために必要不可欠な機能である。しかし林業従事者は減少し手つかずの里山が増え、産業や防災において危険な状況となっている。

3) まとめ

京北町は古くから京都の発展を支え、主要産業である林業の需要やあり方は、時代とともに大きく変化してきた。林業は日本の文化や環境の保全にも深く関与しており、地方と都市のつながりは切り離すことのできない関係性にあると言える。

現地活動報告

0. 余野について

かつて都を支えた丸太産業や伝統芸能は廃れ人口も減り、山や畑が手入れされないまま放置されている場所が年々増加している。実際に私たちが訪れた際も、地元の人々とすれ違うことがないような地域であった。

1. 余野ファームの活動目的、理想

余野ファームは里山(余野)の過疎化対策としてサイクルを回す、サステナブルを目指し活動を行っている。その一環として余野ファームは、様々な種類の動物を飼うとともに、それらを活かした農作業等を現在進行させている。

・完全循環型の里山を、現代社会の暮らし方に落とし込み再興させるプロジェクト。

・里山にある自然資源の経済価値を高めて新たな雇用をうみ、再び里山に人が移り住める環境作りに取り組んでいる。(YONO FARM ABOUT より)

里山とは：原始的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域（環境省）

2. 具体的な活動内容

(1)合鴨農法、羊、山羊の飼育

合鴨による①水田の草取り、②糞を肥料とした無農薬栽培、さらに③合鴨肉も生産できる循環型の農法。羊や山羊は放牧地草刈り+糞による地力回復に活用。

(2)廃材利用

パレットで小屋を作り、解体した家の柱を再利用し柵にしている。

また、穀殻を利用したエネルギー発電も今後行おうとしている。

(3)今後の取り組みとして『Farm to Table』

循環の中でつくられた肉や野菜のみを利用して、取れたてを調理しお客さんに提供するレストラン。これを余野でも経営したいと考えている。また、その駆け出しとしてベトナムのレストランとの取引も行う予定。

3. 京北森林公園

京北森林公園は京都市指定の特定非営利活動法人「森守協力隊」が管理しており、石窯を用いた伝統的な炭焼きや原木からのシイタケ栽培などが行われている。

森守協力隊は、全国の「森のようちえん」に属する「もりもり京北」を運営しており、京北森林公園など自然の中で幼児教育を行っている。

協力隊の理事長を務める宮西さんは、豊かな自然の中で子供たちが創造力や感性を養えるようにすることを教育方針とし、活動の際は始めに行動範囲などのルールを決めておき、それ以外は全て子供たちの自由に遊ばせている。

4. 課題

- 先行事例がない
 - 収益の低さと大規模な投資、それを支える資本と熱意を持つ中心人物が必要
 - 投資額を抑える必要があるかも
 - 投資した分がしっかりと回収できるのかという不鮮明さ
- 担い手がない 都会から通う方法もあり
- 余野地域へのアクセスがあまり良くない。プロジェクト自体観光的な取り組みのため、人が来なければ話にならない。本当に人は来るのだろうかという問題。

京北ワークショッププロジェクト活動報告

京北のリアルとまちづくり

Bチーム

秋田、福富、藤木、三宅

参加のきっかけ

- 「過疎化」「田舎暮らし」といった言葉を耳にする機会が多いが、それを実際に感じる機会は少なかった。

活動内容・成果報告（●は内容、→は成果）

事前学習

- 京北の現状と移住者に関心をもち調べた。京北のもつ問題点とそれを解決へ導いた他の町の成功事例を基に、京北の課題解決へ向けた提言をまとめた。
 - 移住者に対して支援を行うことが重要であると再確認した。
 - 移住推進には「職」・「住」といった生活の基盤を確保するだけでなく、大都市とのアクセスのよさ、先輩移住者との交流や気軽に体験できる「お試し移住制度」の確保、そのまちの魅力を発信する能力の確保が重要になってくることが分かった。

現地活動

- 京北地域に2泊3日でフィールドワークに取り組んだ。
 - 京北地域とセミナーハウスとの往復はJRバスを利用し、田舎の公共交通機関の現状を体感した。
- 1日目：木育や木材加工の現状についてレクチャーを受けた。
 - 木材にかこまれて生活することの重要さや国産木材の流通から見る日本の林業の抱える苦しさを学んだ。
- 2日目：終日茅を刈り、夜は京北で林業や農業に携わる方からレクチャーを受けた。
 - 茅は葺き替えの際に大量に必要なが、準備には大変な苦労があることを実感した。

- ▶ 夜のレクチャーは実際に京北で林業や農業に携わる方から苦しみと楽しさを同時に学んだ。
- 3日目：午前①古民家に住む方にお話を伺った。午後は②移住支援に携わる方と③地域密着型のベンチャー企業を営む方の二手に分かれてお話を伺った。また京北町銘木生産協同組合で銘木の実物を見学した。
 - ① について：実際に先祖代々京北の古民家で生活されている方のご自宅に訪問させて頂いて、お話を伺った。茅葺屋根の家は夏は涼しく、冬は暖かいなど生活しやすいことが分かった。しかし、茅葺屋根を維持するには負担が大きく、現在古民家は減少傾向にあるという。
 - ② について：京都市京北森林公園にてお話を伺った。ここは里山と都市を結ぶ体験型交流施設となっており、BBQ やキノコ狩り、子どもたちが自由に遊べる森林教室等様々な取り組みが行われている。また、移住支援については定住者と移住者には対立構造が見られるといった内容のお話も聞くことができた。
 - ③ について：集落で近代的な手法を使いつつも、昔の里山のように地域で自給自足し、循環する集落を形成させる取り組みを行っておられる代表の方に話を伺った。プロジェクトの展望や課題を深く教えていただき、取り組みの意義と難しさに触れることができた。

まとめ

プロジェクトを通して学んだこと

- 京北を通して農村での生活の厳しさというものが垣間見えたが、同時に地方はただ寂れていくだけでなく、それを食い止めようと活躍している人もたくさんいることが分かった。
- フィールドワークを通じて事前学習の提言はおおむね間違っていないと感じたが、一方で「核となる人物」をどう確保していくかが重要であると感じた。よい解決策を考え、形にし、それを実行する人がいなければ問題は解決しないからである。これからは、問題解決に向けた施策を提案すると同時に、それを「誰がやるのか」について考える必要がある。

「地方における暮らしの現状と対策」

GB クラス C チーム：木寺・櫻井・田中・松本

I. 導入

中山間地域は日本を支える基盤であるが、人口減少と高齢化という大きな課題を抱えている。そんな地域の現状を紹介し、高齢者と移住者という二つの側面から解決策を提案したい。

II. 中山間地域の役割とは？

- ①国土保全：河川の上流の整備などによる、下流の洪水被害の軽減等。
- ②食糧確保：日本の農地面積の約 4 割以上を占め、農業において重要な位置付けとされている。

III-i. データから見る中山間地域の現状・課題

ここからは、地域住民と移住者の考える課題や施策について述べる。

○地域住民の中山間地域の評価▶医療施設や交通の便が悪い（特に医療施設を重要視している人が多い）。

⇒周囲とのコミュニケーション機会や生活インフラの充実が生活への満足度に影響している。

⇒しかし、総合的な環境、住みやすさについては満足している割合が高い。

○移住者の考える移住者を増やすための施策▶一番に労働支援、次点で住宅支援。

III-ii. 実際の現地の印象から見る現状・課題

事前に調べた通り、「住んでいる人は地方での暮らしを不便に思っていない」ということを実感した。

また、住民は人口減少に対して、伝統を廃れさせたくない気持ちはあるものの諦めが見受けられ、それも衰退を加速させている一因ではないかと思われた。

○Good Point：京北は景色が綺麗で、澄んだ空気の中身体を動かして働けば、健康に生活できそう。

○Bad Point：生活には車が必須。新しい移住者が来ても、地元民固有の関係性が既にあると馴染みにくそう。

III-iii. レクチャーから感じた京北地域における産業の現実

農業	林業
・農業の金銭的な課題（機械、獣害）	・機械化が遅れた 機械じゃないことに価値
・国の政策とのギャップ（中山間地域向きではない・兼業農家向きではない）	・林業は多くの工程が必要な産業のため、遠くに売りに行けない
・農業を担う人がそもそもいないため、経営だけやすることはできない	・農業やめて林業家に転身する人も⇒需要が減って余る
・田んぼを手放す人が多い	・需要の低下

IV-i. 施策①移住者を増やす ⇒過疎対策のために

人口減少等のために移住者を増やすことが効果的な手段だと言える。事前学習で住宅支援の必要性がわかり、私たちは空き家のリノベーションを提案した。それは、以下のようなメリットが考えられたからだ。

○受け入れ側⇒空き家問題の解決

○移住者側 ⇒趣のある空き家での暮らしを魅力的に感じる

→住宅だけでなく、ホテルやカフェにすること地域の魅力を増やし、地方の雇用問題も解決できる。

★実際に空き家のリノベーションで民宿を経営している方の見解

- ・空き家をリノベーションし新規移住者を増やすという考え自体はよいと思う
 - ・地域住民と新規移住者の間での対立の存在
 - 地域住民は伝統を守るためにもこれ以上人口減少してほしくないと考えている。
 - 一方で移住者によって現在の暮らしが変化することに対する恐怖がありここに矛盾が存在する。
 - 現実的に移住者は短期間でほかの地域に移ってしまうという現象
- ＋これを解決するために地域住民、移住者との摩擦を軽減する必要性

★京北移住者が行う新規事業

京北伝統の窯で作る炭、キノコの栽培、森のようちえん、空き家のリノベーション、余野ファーム
 ⇒このように積極的な移住者のアクションが、さらに多くの移住者を増やすことに繋がるのだ。

IV-ii. 施策②ユニバーサルデザイン（以下U.Dとする）⇒受け入れ側の高齢者に対して

高齢化率の上昇から高齢者の事故も増加傾向にある。このことから高齢者に対する住宅面の設備の充実、特にU.Dが重要であると考えた（資料1）。またU.Dを取り入れた住宅の設置から、移住者の定住の促進や社会問題の解決、コストの減少が可能と考えた。

基本設計項目	設計項目の具体的な内容
1. だれにでも使いやすい 寸法・形状 ・動作 ・アダプタブル ・対象者	利き手とか利き足を限定しない寸法・形状 片手でも使いやすい寸法・形状 適切な部材を付加することにより、使いやすくなる だれにでも使いやすい寸法・形状、動線計画
3. だれにでもわかる表示 ・基本性能 ・視覚 ・視覚以外	勘違いを与えない表示 大きさ、色遣いによる視認性、識別しやすい 絵文字を利用 触覚や聴覚により認識できる表示 暗所でも識別できる工夫
3. だれにでも楽な操作 ・操作方法 ・操作姿勢 ・認識	単純動作による操作、トルクを要さない 利き手を限定しない、操作性を限定しない 楽な姿勢、能率のよい操作 操作感が自在できる
4. だれにでも安全な設計 ・失敗のない操作 ・万一の安全 ・安全・健康	覚えやすい、間違えにくい操作性 手順が誤りにくい設計 誤操作でも壊れない設計、対応がとりやすい設計 異常の発生がすぐわかる 生理的・心理的に支障のない設計
5. だれにでも容易な維持管理 ・部品交換 ・清掃など ・その他	長寿命の部品設計、部品交換が容易 清掃が容易、維持管理の注意表示を明示 故障箇所がわかりやすい、部材の交換・付加が容易 部品・用具が入手しやすい、リサイクル性
6. だれにでも受け入れられる デザイン	美しいデザイン

資料 1

〇かやぶき屋根の家と将来性

★萱刈り

京北の伝統を知る一環として茅狩りを行った。感想として“非日常的な体験であり楽しかった”、“高齢化の中でこれを毎年行うのは困難”、“長いスパンで考えたとき今後存続不可能では”という意見。

★河原林邸（U.Dの観点から）

京北地区の伝統を守りながら生活している河原林さんのお宅を訪問した。施策2では高齢者が長期間にわたり安定して暮らせる住宅づくりの重要性を確認したが、これに基づきから河原林さんのお宅を観ると明確なメリット・デメリットがあると感じられた。

メリット	デメリット
・夏は冷房いらず	・夏以外は寒い
・1階建て、平屋	・専門的な道具、設備が多く手入れが大変
・囲炉裏で出た熱を活用する床暖などの自然と調和した生活	・高い段差が多い、手すりがないなど高齢者への配慮が少ない

→伝統を守りメリットを生かしながら安心して居住できる住宅を目指す必要性

具体例：自然と調和した設備を設置したまま安全に使用できるように柵や換気設備を設けるなど。

V. 感想（まとめ）

事前学習で地方の課題と解決策を考えたが、実際に京北地域を訪れると地域課題解決の「本当の難しさ」を痛感した。それは、実際に暮らしてみないと気が付かないような地域特有の文化が多くあったということだ。またコストや時間のかかる活動が多く、それらが「日常」になることの大変さを実感した。だからこそ、短時間の非日常的体験ではなく、当事者として地方の課題に深く関わっていくことの必要性を強く感じた。

古民家再生～クラウドファンディングの活用～

I はじめに

地方創生を考える上で、古民家再生に着目した。調べていく中でクラウドファンディングを活用した事例が多く見つかり、その資金の集め方が古民家を再生する目的や今後の在り方を考える上で魅力的なものだったため、これをテーマに調べていくことにした。

II クラウドファンディング

クラウドファンディングとはインターネットを介して、不特定多数の人々から資金を調達する仕組みであり、リターンの種類に応じて投資型、寄付型、購入型、の3つに分類することができる。

投資型は、自己資金や事業経験が重視される傾向で、出資者への対価が配当金や株式といったところで比較的高額な資金調達が可能である。寄付型、購入型の特徴として、審査基準がプロジェクトの実現可能性であること、リターン義務がある代わりに返済が不要であること、コストが抑えられるという点が挙げられる。これらは実績がなくても、信用・共感・応援の想いでお金を集めることができる。古民家再生は改修が目的ではなく、人が集まる場所に生まれ変わることに、持続可能性があることが重要である。

III 町家コミュニティスペース “てらはうす”

立命館大学院生川崎敏矢さんが開設した二条駅周辺のコミュニティスペース。築100年を超える町家の中は、1階がフリースペース、2階が有料のコワーキングスペースとなっている。開業資金として返礼品のこだわりが詰まったクラウドファンディングで275万円を集めた。スペース設置後の運営資金は、月に1回ほど行われるゲーム大会などのイベント参加費・コワーキングスペース利用料・1階で売られているソフトドリンク代、そして川崎さんが営む他の事業の収入で賄っている。

現時点では“てらはうす”の収入のみで運営することが難しい状況である。継続的な運営資金の獲得のために寄付金額に応じた特典を用意するなど工夫をこらしている。

IV さいごに

古民家再生の資金を集める方法の一つとしてクラウドファンディングは重要な役割を果たすといえる。

しかし、その費用（リノベーションや運営、保全）が高くなることが大きな課題として挙げられる。

そこで、古民家再生後の利用方法（宿泊施設、図書館、共有スペース…）などについても、事前に十分な検討を行い、その上でクラウドファンディングという手段を最大限活用できる仕組みを構築していく必要がある。

京都市京北森林公園

I 森林公園とは

里山と地域をつなぐ体験交流施設のこと

II 学び

【森林教室】

里山活用イベントの1つ

まずは豊かな自然の中で子供たちに自由に遊んでもらう。

特徴：遊具を与えない

何故か？：目的がないところから自分で考えてなにかを生み出す思考を育てる

【炭焼窯・杉の炭】

京北伝統の石窯で作る京北の杉を使った炭

出来上がりは煙の色や匂いで判断する。

その職人技は経験しないとできない。

後継者育成を試みているが、難しい。

→他の地域のものではなく京北（地元の）のものを使って京北を盛り上げていこうとしている。

この活動はNPOで行っているものであり、本来は手間がかかる作業である上に、稼ぐことはできない。『想い』がないとできない仕事。

【きのこ栽培】

原木から作る珍しいしいたけ。

現状では岩手や岡山の原木を使用している。

目標は京北の木を使用し、ブランド化して販売すること

余野ファーム

I 余野地域について

京都の京北地域に位置する里山。かつては、都の建築を支えた北山丸太産業や伝統芸能は廃れ、人口も減り、山や畑が手入れされないまま、放置されている場所が年々多くなっている。

II 余野ファームの活動目的、理想

余野ファームは里山(余野)の過疎化対策として、里山活用を行なっている。また、余野という里山の中でサイクルを回す、サステナブルを目指し活動を行なっている。

III 具体的な活動（1,2）& 今後の活動（i, ii）

（1）合鴨農法、羊、山羊の飼育（2）廃材利用

（i）バイオマス発電（ii）farm to table

IV 課題

先行事例がない

収益の低さと大規模な投資、且つそれを支える資本と熱意を持つ核となる人物が必要。

「草津宿魅力発信プロジェクト」

メンバー：佐藤 光梨（経済学部）

市川 愛海（食マネジメント学部）

受入団体：草津宿街道交流館

1. プロジェクト全体の目的と課題

〈目的〉

草津宿本陣及びその周辺エリアの魅力を発信する

〈課題〉

De 愛ひろばは賑わっているためここから草津宿周辺にも足を運んでもらうきっかけを作る

〈現状〉

周辺エリアも含め人通りが少ない

考えられる原因→知名度が低い？

→魅力が伝わってない？

2. 活動内容 I (マルシェについて)

De 愛ひろばで行われる「草津 farmer's market」に出店する

〈詳細〉

草津宿エリアの昔ながらの商品と新しくできた店の商品を融合させたマルシェ

→草津宿周辺の魅力を発信し、足を運んでもらうきっかけをつくる

販売予定の商品

① お香 ② 茶葉 ③ 佃煮 ④ たい焼き ⑤ クッキー ⑥ ろうそく など

問題 金銭を扱うやり取りができない

万が一の対応と責任の所在

⇒頓挫

3. 活動内容Ⅱ(マーケットリサーチについて)

〈目的〉

知名度・関心のあるイベントについて調査を行い今後に役立てる。

〈結果〉

回答者 71 人

? 知名度について?

知っている 23 人

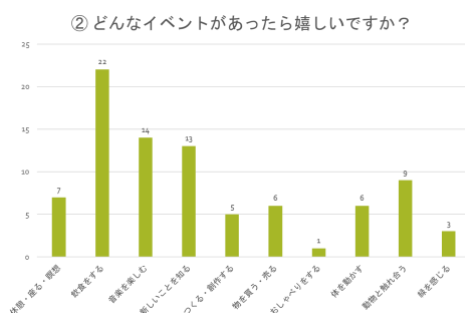
知っているが行ったことはない 31 人

知らない 17 人

→知ってはいるが行ったことがない人が多い

? どんなイベントがあれば嬉しいか(複数回答)?

→飲食が人気



〈結果をもとに考えたイベント〉

・若者に人気の歌と年配の方が興味のある歌を混合させた音楽イベント

音楽は幅広い世代に親しまれているため多くの人が興味を持ってくれるのではないかな。

・江戸時代 1 日体験ツアー

本陣に宿泊し着物の着付けや食文化を体験する。本陣では飲食や宿泊が禁止されているが、周辺のカフェや老舗料理店などに協力を得られれば料理の提供ができるのではないかな。宿泊については本陣周辺には空家があるのでリノベーションして宿泊施設にしてはどうか。

4. 最後に

活動はまだ終わっていないため、この報告は現段階のものである。今後は草津宿街道交流館の方々との検討会やラジオ収録がおこなわれる予定。

草津ブランド PR 実施プロジェクト

〈メンバー〉

伊藤、塚田、有馬、荒瀬、木山

〈企画の概要〉

私たち、草津ブランド PR 班は、草津市の特産品で構成された、「草津ブランド」の認知度を上げるための活動を行いました。「草津ブランド」は、市内の地域産業の活性化のために認証されたブランドですが、その知名度は低いのが現状です。私たちが学生ならではの発想やパワーを使って、「草津ブランド」の認知度を上げることが目的です。

〈活動内容〉

・草津ブランド市で草津ブランドを PR

草津ブランド広報活動の一環として、草津ブランド市と呼ばれるイベントが行われました。私たちは、ブランド市に出店する、5 品目に関連する POP 広告を作成しました。POP を作成するためにあたって、出店先に取材にも伺いました。取材内容としては、ブランドとしてのこだわり、歴史的背景、特徴、販売場所、ブランド品に対する思いなどです。取材内容を取り込みつつも、誰がみても分かりやすいようなデザインになるように POP を作成しました。

・草津ブランドのパンフレットの作成

ブランド広報活動の集大成として、パンフレットを作成しました。作成したパンフレットは、大学生や事業者関連の方だけではなく、草津市内の小学3、4年生にむけても配布します。

・草津ブランドの1つの愛彩菜を立命館大学の食堂で販売する（5月に実施）

立命館大学の学生に、地域の特産品を知って欲しいという思いから、学食で愛彩菜を料理として提供する企画を実施します。メニューは、愛彩菜の炒め物、煮物など只今検討中です。料理の感想を知るために、期間中にネット上でアンケートも実施予定です。

・愛彩菜、松里もなか、松里みかさ、うばがもちを大学内で物販する（5月に実施）

食堂で愛彩菜が販売する期間にあわせて、ミニマルシェのような形式で草津ブランドの物販を実施予定です。提供することが出来ない、工芸品やお酒も、写真や、見本を用いてPRします。草津ブランド市で使用したPOPも使い、華やかに開催する予定です。

〈学んだこと〉

- ・ブランドを広報することの難しさ（どのようなデザインで誰を対象とするのか、ブランド品のどの面をPRするのか）
- ・地域の人と関わることの面白さ
- ・チーム活動の難しさ

シチズンシップ・スタディーズ 活動報告

～プロジェクト名「草津×立命館 その悩み、立命生と解決しませんか」～

28112000706 薬学部薬学科 2 回生 中原真愛

12401907635 経済学部経済学科 横田壮平

22801900414 理工学部建築都市デザイン学科 清水優真

1. 草津市コミュニティ事業団について

本プロジェクトは、「草津市協働のまちづくり条例」にて中間支援組織に指定されている公益財団法人草津市コミュニティ事業団と協働し、草津市のまちづくりを推進するために開始された。近年、日本は急速に超高齢社会が進み地域自治組織や町内会での高齢化や人手不足が問題となっている。一方で、ボランティア活動や、事業の立ち上げをしてみたいと考えている若者や学生も数多くいるものの、運営・広報のやり方が分からず実行に移せない人も多い。こういったまちづくり状の課題を克服し、それぞれの活動を支援するのが事業団の役割である。具体的には、ボランティアの市民活動団体や地域自治組織へのコーディネーター・助成などを通じた資金支援・運営や会計・法人化といった相談対応や手続きサポート・実務講座やワークショップといった学びのサポートから、広報誌・FMラジオによる広報サポート、また、草津市内で活動する市民活動団体の実態調査なども行っている。

2. 本プロジェクトの目標

本プロジェクトでは、立命館大学 BKC キャンパスの学生サークルをターゲットとし、草津市内の地域まちづくり協議会と一体となってその地域の課題解決や草津市をより盛り上げていけるような企画を立ち上げて貰うことを目標とした。草津市の HP によると、「地域まちづくり協議会」とは、草津市内に 14 あるおおむね小学校区を区域として地域の課題解決、魅力創出などの地域まちづくりを主体となって行う、地域を代表する地域自治組織で市の認定を受けて活動する団体である。

3. 開催するまでの過程・難題

まず、プロジェクトのテーマを決めるために、草津市が抱えているまちづくり状の課題と、立命館の生徒の身の周りで起きている問題のすり合わせを行った。その結果、①草津市は若者のアイデアを取り入れて新しい風を吹き込みたいという願望があるものの、大学の情報が届きにくく、また実際に学生とつながり方法等がわからないという現実があること。一方、立命館では、②新型コロナウイルスの影響で活躍の場が狭まり、後世への継承が難しくなったという問題を抱えていた。

これらの現状を踏まえ、草津市内の地域まちづくり協議会と立命館大学 BKC キャンパスのサークルをターゲットにし、上述したプロジェクトの目標を定めた。

本プロジェクトの実現に向けて事前に準備したことは、地域まちづくり協議会が現在または近い未来に抱えている実際の課題等を把握するためのヒアリングである。各地域での課題をより明確化するために、主催者である立命館大学の生徒 3 名と事業団職員が共に、7 つの地域まちづくり協議会に出向き、ヒアリングを行った。

しかし、このマッチング企画の開催日が、立命館大学BKC学園祭の前日であったことから、参加に前向きな姿勢を見せるサークルが少なかったことが難題であった。それを打破するために、各サークルの所へ直接出向き、これまでであった学生サークルと地域との交流機会と、このマッチング会を通じた後での交流との差別化をはかり、サークルがこの企画に参加するメリットを明示し、学生の参加意欲を刺激するよう努めた。

4. 参加団体の紹介

山田学区まちづくり協議会、南笠東学区まちづくり協議会、遺跡と萩の育む玉川まちづくり推進会議、矢倉学区まちづくり協議会、老上学区まちづくり協議会
Flower-vegetable、BohNo、将棋研究会、Design Factory、立命館学生コーディネーター（サービスラーニングセンター）

5. マッチング会当日の流れ

マッチング会には、五つの地域まちづくり協議会と五つの学生団体が参加した。草津市内でも初めての催しとあり、そのほかに当日参加の見学者も多数集まった。まずは学生サークルによるプレゼンを行った後に関心をもった学生サークルのテーブルに地域まち協が回り 20 分の話し合いを行うワールドカフェを合計 3 ラウンド行った。それぞれのテーブルで学生団体からは自分たちができること、したいこと、またこうした要望なら応えられると言った内容を話し、まちづくり協議会では実際に困っていることや学生団体の要望に対してできる対応などを話した。ワールドカフェ終了後にはそれぞれのサークルごとに話し合われた内容を発表し、会場の参加者全員で共有した。

6. イベント終了後・感想・学んだこと

イベント終了後には参加者全員からアンケートを取った。地域団体の多くの意見に共通していたのが「普段、学生と話す機会がないので貴重な時間を過ごすことができた」ということだった。また、逆に学生団体も地域まちづくり協議会といった地域まちづくりの実践者からの話を聞く中で、自分たちの活動の幅を広げながら地域での課題解決に貢献できる議論に発展するなど、これまでにない経験にすることができたという意見もあった。

地域まちづくり協議会と立命館学生という同じ草津にありながらなかなか交流がなかったものが今回の企画を通じて初めて交流する機会を設けることができ、まちづくりという観点からも大きな一歩になったと考えられる。

<https://www.city.kusatsu.shiga.jp/kurashi/chikicomunity/kyogikai/torikumi.html>

みずとわプロジェクト

- 報告レジュメ -

みずとわ班 A

「メンバー紹介」

奥村凧紗、古家尚悟、瀬川真由、岸本美穂、高梨凧都、松原永

「茨木市の北部地域について」

京都市や大阪市へのアクセスがしやすく、商業施設や教育機関も充実している茨木市であるが、少し上に行くと美しい里山に囲まれ、新鮮な農産物が育つ自然豊かな地域がある。それが茨木市北部山間地域（ほくち）である。茨木には自然に囲まれた魅力的な場所があるのかと疑うほどしかし、ほくちでは若年層を中心とする人口流出や農家さんの高齢化などにより地域経済が衰退している現状にある。

「一般社団法人みずとわについて」

一般社団法人みずとわとは、「水と〇（わ）で心を動かす」をミッションに、「人の心を動かすこと」を事業にしている。地域内外の共感者や企業を巻き込み、地（知）給地（知）足の循環型のまちづくりを行っている。モットーは「にんげんはうんこ製造機。それ以上でも以下でもない」。

みずとわのメンバーである、中井さん夫婦は千提寺ファームというウド農家を営んでいる。昔ながらの、藁の発酵熱を用いた栽培方法でウドを育てている。同じくみずとわのメンバーである横峯さん夫婦は、清阪テラスという養鶏場を営んでいる。日本に多いケージ飼いでなく、自由に動き回れる平飼いという飼育方法で養鶏をしている。

「課題解決に向けた受け入れ先の挑戦」

課題：地球温暖化（地球温暖化を危惧して立ち上げた）、水問題

挑戦：循環型農業、循環型社会

「地域活動を行う上でのチームの目標」

1. 出会いを通して自ら学び、魅力を発見する
2. 感謝の気持ち
3. みずとわさんでの体験を生活に落とし込んで、地域循環の一因になる

「地域の課題解決に向けた活動(試行錯誤を含む)」「私たちの活動」

清阪テラス：自然養鶏を軸にした有畜型循環農業が行われている。具体的には、地域周辺のビール粕やおからをエサにしたり、エサの発酵餌料にも地域の工場からもってきた竹のおが屑を活用している。昨今の大型養鶏場は鶏たちがひしめき合った飼い方が成されており、そのような現状に疑問も呈され、行動をなされている。

千提寺ファーム：現在において茨木の伝統野菜みしまウドを作っている唯一の農家である。今回学生はみしまウドの小屋作りのお手伝いをさせていただいた。みしまウドは日光のあたらない場所によって育てられている。そこで学生はみしまウドの小屋の入り口にわらをつめて、小屋に日光が入らない環境を作り上げた。

「チーム目標にどれだけ近づけたか」

1. 農業と養鶏のつながりを知ることができた。
 - >> 組み合わせによって異なる価値があるのではないかな？
 - 地域と農業の関係性を学ぶことができた。
 - >> 顔を見ることのできる関係性に魅力を感じる。
2. 鶏を絞める人がいるから私たちが食べることができる。
 - >> 自分ができないこと、やりたくない仕事をする人がいる。
 - 職業について調べるようになった。
 - 農業の大切さを知ることができた。
 - >> 普段野菜を食べられることに感謝。
 - 日頃頂く食材にありがたさを持つようになった。
3. 清阪テラスの卵を探すようになった。
 - コンビニで売っているカット野菜（サラダ）を買う機会がへった。
 - 使い捨てが多い生活に違和感を持つようになった。
 - 炭焼きに関する情報をゼミに共有した。

「個人の成長(取り組んだ社会問題に対して、今後は どういう立ち位置をとるか)」

・ 普段当たり前のように買ったり食べたりする製品が、どのように作られ、どのような問題を持っているのかに関心をもつことができるようになりました。今まではなるべく安いものを選んで買っていました。地元のものや茨木のもの、製法に気を使っているもの、フェアトレードのものなど、自分が納得して買えるものを選ぶようになりました。その一方で、安価に売られているものがただよくない物というわけではなく、生産者の努力があって実現したものだと、感謝の気持ちをもつことも出来るようになりました。

「まとめ」

・ 活動を通してみられる、みずとわさんの課題解決のための工夫が印象的でした。地域循環という大きな取り組みについて学ぶことが出来ました。

メンバー紹介

北万里子

河邊茜音

五明亜里沙

塚本芽生

澤田歩佳

団体紹介

一般社団法人みずとわ

「水と〇（わ）で心を動かす」をミッションに「人の心を動かす」ことを事業にしている団体。「にんげんはうんこ製造機。それ以上でもそれ以下でもない。」をモットーに、地域内外の共感者や企業を巻き込み、地（知）給地（知）足の循環型のまちづくりを行っている。

企画について

『焼き芋をしながら田んぼメンバーへインタビュー』

清阪 terrace.で田んぼをシェアしている方々は、専業農家ではないので私たちの立場に近い。そこで、田んぼメンバーを私たちのチーム目標達成のためのロールモデルとして、どのような思いで田んぼで作業をしているのかをインタビューと意見交換をした。インタビューでは事実質問を意識して、事実から彼らの思いを知ろうとした。大阪北部地震をきっかけにサバイバル能力を身につけたいと思った方や読書の末に農業の大切さに気づいた方、ただ楽しいから農作業をしている方など、メンバーそれぞれのシンプルで合理的な考え方を聞くことが出来た。

企画を通したみずとわへの貢献

ビジョンがはっきりしているみずとわでは、学生の私たちに人手以外には何を求めているかを考えた。私たちは、みずとわでの活動を日常に落とし込むことが求められていると解釈したので、田んぼメンバーをそのロールモデルとしたインタビューを行った。この企画はみずとわの皆さんにも田んぼメンバーや私たちの思いを聞いてもらう機会になったし、私たちの学びを深めてみずとわでの活動を生活により落とし込むための機会になることでみずとわに貢献した。

みずとわのニーズ

- 地域で活動するプレーヤーを求めている
- より良い社会の実現に向け、自らの手と足を動かしてほしい
- 出会った人たちと共に活動し、地域資源の循環を担うプレーヤーに出会いたい

チーム目標

- ① 感謝の気持ちを持つ
- ② みずとわさんでの体験を生活に落とし込む
- ③ 地域循環の一員になる
- ④ 出会いを通じて自ら学び魅力を発見する

チーム目標の達成度

- ① 農業の大変さや、鶏を絞める人がいるから自分たち消費者が食べられるという事実など、私たちの生活を支えてくれている苦労や現実を知ること、毎日当たり前に食材を買って食べられることに、もっと感謝の気持ちを持とうと感じ、自分ができない仕事ややりたくない仕事をする人の職業を調べるようになった。
- ② 清阪の卵を探すようになった。
コンビニで売っているカット野菜（サラダ）を買う機会が減った。
使い捨てが多い生活に違和感を持つようになった。
- ③ 炭焼きに関する情報をゼミで共有した。
- ④ 農業と養鶏とのつながりを知れたことで、組み合わせによって更なる価値があるのではないかと思った。
地域と農業の関係性を学べたことで、顔を見ることが出来る関係性に魅力を感じる。

学びと成長

- ・みずとわさんが目指す循環型社会について理解し、自分たちにもできることが何かないか探すよう努めた。
- ・地域と農業の関係性を学ぶことができた。
- ・農業の大変さを身をもって感じる事ができた。普段食べたり買ったりする製品がどのように作られるか、どのような問題を持っているのかについて関心を持つようになった。日頃頂く食材に感謝したい。

まとめ

田んぼメンバーの方々がどのような思いで活動をされているのかを知ることができた。学んだことを生活に落とし込むことを初めは難しく考えていたが、インタビューを通して、大切なことは、どれだけ生活に落とし込めるかではなく、自分自身がどのような思いで取り組むかであると気づけた。

FP茨木Ritsプロジェクト

参加者名 ハンデヒ 岩脇晴香 金子桜 河合美奈 高部詩万

フードパントリー茨木

活動先の情報

フードパントリー茨木では、市民の方から家庭内で使わない、未開封で賞味期限が十分に残っている食材を頂き、困っている方々へ直接お渡ししています。フードパントリーでは、食材や生活物資を必要としている方々へ提供することで、食品ロスの削減と共に困窮世帯への援助という環境と福祉両方の側面から社会貢献を図っています。

活動内容

フードパントリーでは、お米やインスタント食品、お菓子、缶詰、乾麺などの食料品だけではなく、ティッシュやマスクのような日用品なども含め、日常で誰でも使えるようなものを月に2回決まった日に回収しています。その後、集まった食料品を仕分けし、消費期限を確認して各家庭に必要なに応じて直接選んで頂けるような形をとっています。各家庭の事情に合わせてこちらからお届けに行く場合もあります。

ボラカフェ

活動先の情報

ボラカフェは「ボランティアカフェ」の略称で、コロナ禍による繋がり希薄化を課題に取り上げ、新たに生まれた取り組みです。「みんなが作る繋がりカフェ」をコンセプトとし、茨木市に住む全ての方が気軽に立ち寄れる居場所づくりを設けました。地元の茨木高校のボランティア部を中心として多くの学生ボランティアと子どもたちから高齢者の方々を含む地域のすべての方々と折り紙などの創作活動を通して交流できる、暖かい場となっています。

活動内容

部屋の装飾やボラカフェに来てくださった地域の方への接客を主に行います。しかしながら、ここではアルバイトのように実務的な接客をするのではなく、来てくださった方々にとって居心地の良い空間を作るために、相手と楽しくコミュニケーションを取るかが鍵となります。誰もが気軽に参加できることで地域のコミュニティを広げ、誰もが居やすい居場所づくりと地域の活性化を心がけています。

子民家よってこ食堂

活動先の情報

子民家よってこ食堂は、空き家を活用してつくったコミュニティ施設です。この施設では、子ども食堂だけでなく子育てサロンや学習会、ご長寿サロンなども開かれ、幅広い世代の交流が盛んに行われています。その中でも子ども食堂は、子どもの食事及び子どもが安心して過ごせる居場所を提供し、子どもが抱える悩み、家庭環境等の問題を早期に発見することで、必要な支援機関に繋ぐことを目的としています。

活動内容

子民家よってこ食堂は、元々子どもたちが部屋の中で食事ができるように活動していましたが、現在はコロナ禍のため、持ち帰り用のお弁当の配布のみを行っています。活動は月に1回夜に開かれ、毎回100～150人分のお弁当を作り、提供しています。また、夏休みなど長期休暇中では、昼食も用意しています。

プロジェクトを通して学んだこと

ハンデヒ(セッション1)：フードパントリー茨木

私は皆がボランティアに参加する理由について気になっていて、実際ボランティアに参加しました。特に今回は運よく三つのボランティア活動に参加することができましたが、どの活動も温かい雰囲気、作業をしながら他のスタッフさんや来てくれた方々とお話するのが楽しく感じました。この三つの活動には居場所を求めて来てくれる方が多いですが、自分自身もただ活動を手伝う側ではなく、ここをもう一つの居場所であるように感じました。ボランティアに参加することには、そんなに特別な理由はなくても、自分みたいにそこを自分の居場所であると感じるのも要因の一つかもしれないと気づきました。

岩脇晴香(セッション2)：フードパントリー茨木

私はボランティアを通して、他の人への想像力を働かせる重要性に気が付きました。取りに来てくださった方とお話させていただいたときに、自分がどのような受け答えをすればいいのかに迷うタイミングがありました。自分が次にどのように会話を続けるのか、相手がどうしてこの質問をしているのか、そればかり考えてしまい、相手がどのような気持ちで私と会話をしてくださったのかそこまで考えることができませんでした。会話をしているときに自分のことだけでなく、初対面であっても相手が誰であっても相手のことまで思いを馳せることが大事だということに気が付きました。

金子桜(セッション3)：フードパントリー茨木、子民家よってこ食堂

私は、貧困や格差などの社会課題に対して、身近な問題として捉えていたつもりでしたが、今回初めてボランティアに参加して、これまでのイメージが大きく変わりました。実際に現場で社会課題を解決しようと、強い目的意識を持って活動している人たちの姿をみて、一緒に参加できて、私にとって新しい体験と刺激をもらえたと同時に、自分の無力さも感じました。また、ボランティアをする意義や一人一人の社会的背景、問題が起きざるを得ない状況に陥った事情や原因を知り、その本質的な問題を知る必要性があると思いました。

河合美奈(セッション4)：フードパントリー茨木

この活動に参加したことにより、食品ロスについて常に考えるようになりました。私たちにとって「食」は最も必要不可欠なものです。「食」に触れない日はありません。私は食べたいものを選びますが、食費の節約のために「食」を選ぶことが難しい家庭もあります。今まで当たり前を選んできた「食」でしたが、この今ある幸せが困っている人にとっては当たり前のものではないと身に染みて実感し、物事1つ1つを見直すきっかけとなりました。また、食品寄付をして下さる方々、食品をお渡しするご家庭、他のボランティアの方々といった色々な方々と関わることができ、自分自身の視野を広げることができました。色々な方々と関わる中で、その時出会った人に自分から話題を振り、その人のことをよく知れるような話を引き出せるようになりたいと思うようになりました。コミュニケーションの取り方に悩み続ける中で、自分自身の成長に繋がったと考えています。

高部詩万(セッション5)：子民家よってこ食堂、ボラカフェ

自身の行動力に欠けた面を改善すべく、このボランティア活動に参加しました。私にとってボランティア活動をするということ自体大きな試みであり、実際に活動し沢山の学びがありました。日本では少子高齢化そして子供の貧困、これらの問題が深刻化しています。しかしながら、これらの問題に当事者意識を持って行動している人はどのくらいいるのでしょうか。大学生を含む多くの学生は衣食住の整い、優れた教育環境下で勉強しています。この活動を通して私たちがいかに恵まれた環境下で生活していたかを痛感するとともに、ほんの少しの行動で誰かの支えになることができ、また誰かによって支えられていることに事に気づかされました。

OFIXの目標

大阪の国際化と府民の国際交流の促進を図り、国際都市・大阪の発海外への留学支援や、国際理解教育をはじめとするグローバル人材の育成、外国人相談や留学生寮の運営などの外国人受入体制の整備を行うなど、府域における国際化を推進する中核的組織としての役割

国際理解教育目標

日本に外国にルーツある住民が増えてきている背景で日本の生徒や先生に対しては、「世界のさまざまな民族の文化や生活様式、外国人住民の日本での生活などについて理解を深め、国際的な連帯や協力の必要性を認識できるグローバル人材育成を目指している。」外国人のサポーターに対しては、「コミュニティに貢献できる機会を提供しながら、自分の出身について教えることを通じて、現在より多文化共生な環境を育む。」

チーム目標

自分と異なった文化を持つ人とも積極的に関わる

個人目標

大勢の人の前でお話できる能力を身に着けたい。(KIM YONGJIN)

初めて会う人とも自分から積極的に関わられるようにする。(SUMITOMO CLARA)

[JAP]

個人目標の達成度

初めて会う人とも自分から積極的に関わられるようにする。

→100%

毎回の学校同行はほとんどの人が初めて会った人だったけれど、自分から挨拶しお互いの事や国のことを理解しようと努力した。また、学校同行で出会う子供たちとも交流が出来、良いコミュニケーションを取ることが出来た。

活動内容

気づいたこと

- ①他国に対する自分の固定概念を持ち続けることは危険
- ②「〇人1組を作ってください〜い」は言うべきではない
- ③授業する対象年齢により授業内容を変えるべき

成長できたこと

OFIXに貢献できたこと

・学校同行時に、外国人スタッフと同行先の先生方との軽い通訳や、訪問時に職員室に一番最初に入って、そこにおられる先生に挨拶すること。

・レクリエーション時に、外国人スタッフの手が行き届かず、取り残されていた子供に話しかけて、活動の参加を促したり、一緒に活動すること。

・外国人スタッフの母国での生活や日本での生活について認識し、理解を深めることが出来た。

今後の展望

2022年春～2023年冬 APUに行く→国際交流を日常的に実践する

留学生たちの母国での生活や日本での生活、学習について認識し理解できるようになる

[KOR]

個人目標の達成度

大勢の人の前でお話できる能力を身に着けたい。

→100%

全校生200人の前で話すことができ、ゼミや発表会などで緊張しなくなった。大勢の前で発表する時の資料と少数での資料とは異なることに気づき、コミュニケーション能力だけではなく、準備能力が鍛えられた。

活動内容

気づいたこと

1. 母国だからといって自分の国について全部分かっていることではない
2. 対象の年齢を考慮して異なる授業に取り組むべき
3. 幼いほど異文化に対する抵抗感が少なく、学校での異文化がグローバル社会に向けた対策になると感じた

成長できたこと

- ・子供に対する態度や姿勢について実戦で勉強でき、相手によって説明内容を変化させるなどの気遣いができるようになった。
- ・大勢の人の前で発表するとき、視線や話すスピードについて気遣える人になった。
- ・全く文化が異なるヨーロッパやアメリカの方と協力し、外国人への抵抗感がなくなった。

OFIXに貢献できたこと

外国人サポーターとして、韓国を代表し、200人あまりの小学生に韓国文化について説明した。

コロナ禍によって、動画授業も多くなり、韓国を紹介する動画を30分あまりの動画を撮った。

今後の展望→OFIXを通じて、国際交流に貢献する

大学連携による、OFIXでの活動は公式的に終わったが、個人でOFIXで行っているボランティア参加を申請した。

【JAP×KOR】授業案の考案→OFIXの国際理解教育の授業に参加した際に、授業中に居眠りしている生徒や退屈そうにしている生徒が多数見受けられたため、二人とも対象年齢を考慮しながらの授業内容を考えていく必要があると感じた。そこで、韓国の国際理解教育の授業をするという前提で、韓国人のKIMと日本人生徒のある程度の教育段階を知る日本人、住友で発案していきたい。

チーム目標の達成度75%

毎回の一度の活動で、たくさんの国籍や言葉を持つ人と出会い、大満足に異文化交流をすることができたが、活動開始からまだ3.4ヶ月ほどしか経過していないため、活動日数がまだ少ない。KIM及び住友はこれからもこのOFIXの国際理解教育に携わっていきたいと考えているのでこれからも、今まで以上に様々な異文化を持つ人たちと出会い交流し理解しあい互いに学べる機会を増やしていきたい。

み・らいず2レジュメ

1. メンバー紹介

阪田大樹、辻穂乃香、三好春陽、青山瑞樹、梶真衣、高田すず、間瀬ひなこ

2. 活動主体の説明

- ・2001年4月に法人設立
- ・「だれもが、自分らしく地域で暮らせる社会」の実現を目指し、「支援を必要とする人に支援を届け、必要な支援を作り続ける」を目指し、活動。

3. 場所、事業について

◎サポート事業部 (b&g たちばな)

利用者と共に考えながら地域での暮らしを支え、地域そのものをよりよく変えていくことを目指す。

サポート事業部では障がいや経済状況、いじめ・虐待などの理由によって人との関係づくりや社会参加が難しくなってしまった子どもたちや若者たちを対象に支援を行っている。自分で自分の将来を考えて選択し、思いを実現しながら生活できるように、ヘルパー派遣や相談支援を通してライフプランづくりなどのサポートを行っている。

◎スクール事業部 (み・らいずスクール)

1人でも多くの子どもに「分かるとおもしろい」「分からなくて悔しい」「もっと知りたい」という体感を積み重ねてもらうことを目指す。

スクール事業部では発達障がいや知的障がいのある児童期の子どもたちのサポートを行う。子どもたちが将来、社会の中で役割を持って生きていくことができるように SST (ソーシャルスキルトレーニング) を中心とする支援から子どもたちを取り巻く環境を整える。

◎ワークス事業部

実践的なスキル・技術習得はもちろん、自分を知り、相手のことを考えるなど社会で生きていくために必要な力を総合的に身につけてもらうことを目指す。

様々な理由で働きづらさを感じている若者が自分に合った仕事を見つけ、就職するための支援をしている。自分の人生を自分らしく描けるような成長を支援し、同時に企業に対しては、働きづらさを抱える若者を雇用する重要性を伝え、新たな雇用先の開拓にも取り組んでいる。

4. チーム目標について

多様な『自立』を支援することを実践的に学び、物事の捉え方を見つめ直すことで先入観や価値観を変える

5. 活動について

セッション1：b & g たちばな

尼崎市内の小学生を対象とした学童施設であり、彼ら彼女らの安心できる居場所、社会性を育んでもらうための福祉活動を行なっている。ボランティアとして施設職員の方々と共に二日間、子どもたちへの支援に携わった。

セッション2：み・らいずスクールなかもず

就学児から高校生までを対象とし、「人との関わり」が重視され学校や社会で必要なソーシャルスキルを身につけるための支援をしている。なかもず教室で発達支援事業のプログラムにボランティアとして参加した。

セッション3：み・らいずスクール高槻

小学生から高校生までの様々な年代で開講されている、社会で必要な能力を養うための授業にボランティアとして参加した。メンバーは生徒の年齢が違う2つのクラスに参加し、子供たちへ支援を行った。

セッション4：み・らいずワークス

社会で生きていくために必要な力を養うサポートとはどう行われているのか現場に参加し、学びを深めた。

セッション5：ラーンメイト高槻

小学一年生から高校三年生までを対象とし、発達障がいや学校に行きづらい、コミュニケーションが苦手等、いろいろなしんどさを抱えた子供へ個別学習塾として学業をサポートしている。一人ひとりの子供達の特性に合った授業を行うという一般の塾との違い実習を通して経験し、新たな学びを得た。

6. プロジェクトの目標達成度とまとめ

チームの目標達成度は70パーセントとする。私たちはみ・らいず2の目指す社会に向けて学生ボランティアとして参加し、メンバーそれぞれが違う場所での活動を通して成長できた部分があった。また、授業時間内にはそれぞれの経験の共有や比較を通して学びを深めた。チーム目標として掲げた「多様な『自立』を支援することを実践的に学び、物事の捉え方を見つめなおすことで先入観や価値観を変える」という点においては、おおむね達成できた。一方で、活動時間には見学しかできない場合や子どもが少ない活動先での活動であったこと、授業時間内での話し合いでもテーマ設定などに難しさを感じるなど目標達成度を100%にするためにはより時間が必要だったと考えられる。

自分の根っこを掘りあてる機会に

山口 洋典 (立命館大学共通教育推進機構教授)

<担当プロジェクト(GA クラス)>

- ・時代祭応援プロジェクト
- ・衣笠地域連携課プログラム(フジバカマ、花壇、農園)



2005年から始まった立命館大学の教養科目「シチズンシップ・スタディーズ I」は、2021年度から「シチズンシップ・スタディーズ II」と統合され、「シチズンシップ・スタディーズ (以下、CS)」という科目となりました。科目名では数字が取れただけ、なのですが、その前身の科目「地域活性化ボランティア」と比較してみれば、大きな変化がありました。CSは地域の各種活動団体との連携・協力のもとでボランティア活動を組み込んでいたCSIと、半期 Semesterで受講生どうしの相互協力のもとで自主活動を展開するCSIIの要素を濃縮して1つの科目にしたものです。そのため、長年にわたって科目運営に協力いただいた地域の皆さんやサービスラーニングセンターのスタッフにとっては、あっという間に授業が終わってしまった、という印象を抱いていることと想われます。

新たな展開となったCSをより充実したものにしたと自分なりに奮闘してきたのですが、少なくとも私は気づいたら活動報告をする機会を迎えることになった、という印象です。加えて、ワクチン接種が進んだとはいえ、COVID-19の収束・終息を見通すことはままならず、安全を最優先しながら、現場への貢献による地域活性化と皆さんの学びと成長をどうしたら実現できるか、熟慮を重ねました。とりわけ、ボランティア活動(サービス)とチームワークによる学び(ラーニング)のバランスを整えながら展開する地域参加型学習として、いかにした現場で経験したことを言葉にできるか、いわゆる体験の言語化への関心に強い関心を向けてきたつもりです。実際、GAクラスではmanaba+Rのアンケートやその回答結果の掲示板での共有に加

え、Google フォームを用いての体調管理と活動記録(ジャーナル)執筆の一元化を図りました。

こうした運営側の工夫に加えて、今年度は2020年度から春学期に新たにサービスラーニング科目として開講された「現代社会とボランティア」での学習・活動の機会を継続・発展させてみようという思いから、このCSを受講するという新たな展開がもたらされました。そうした受講生の何人かは、同じく教養C群としてキャリア教育センターの科目も併行して受講しているようでした。これらC群科目は「社会で学ぶ自己形成科目」と呼ばれています。引き続き、ぜひ自分で理想的な「自分を探す」のではなく、他者と模範的な「自分をつくる」挑戦を、授業以外でも重ねて欲しいと願っています。

私事ですが、先日、静岡県磐田市の実家で暮らす父を見送りました。近年は入退院を繰り返していたものの、その旅立ちは家族にとっても突然なもので、加えてのコロナ禍もあり、まずはお葬式をどう準備するか、短い時間で数多くの選択を迫られました。皆さんもご存じのとおり、こうした葬送儀礼には長きにわたって地域に根ざした風習があるため、1994年に立命館大学理工学部環境システム工学科に入学して以来、実家から離れて暮らししている私は、既に実家で過ごした時間よりも関西で過ごしてきた時間の方が長くなっていることもあって、図らずも地元の歴史的・社会的・文化的な特徴を改めて学び直す機会となりました。授業は一つの区切りを迎えますが、受入団体の皆さんのご指導に感謝を記しつつ、受講生の皆さんには今回の経験を踏まえ、自分の根っこにある「ふるさと」への思いが掘り起こされればと願っています。

京北WSP@シチスタ始動

景井 充（産業社会学部教授）

<担当プロジェクト（GBクラス）>

・京北WSプロジェクト



京北エリアとの関りは、2007年の冬に始まったからもう10年を超えるが、今年から本シチズンシップ・スタディーズで開講することとした活動は、昨年度に産業社会学部の「企画研究」という教員発意型の授業から開始した、まだ若い活動である。

それまでは基本的には農分野での関わりにとどまっていたが、本活動によって、北山杉で名高い京北の主幹産業である林業分野との接点を持つことができるようになった。すっかり都市型大学と化した立命館大学にあって、中山間地域や農山村、農林分野に関わる学習機会を、小さいながらも学生さんたちに提供できる機会を作ることができたという点で、実に喜ばしいことと思っている。世の中“サステナビリティ”流行だが、国土面積の7割を占める山間地や農林水産分野をスルーして“サステナビリティ”を語ることなど、端的にナンセンスだからである。

茅葺古民家の維持再生を試みる活動をボランティアとして少しお手伝いしながら、① 里山文化の象徴として大事にしながら暮らしのありように触れ（温故知新！）、持続可能性が大きなテーマとなっているポスト現代社会を構想するためのヒントを探ること、② 中山間地域の農山村で暮らしながら将来展望を切り開こうとしている団体や個人の諸活動に接する機会を持ち、自然環境や地域のさまざまな特性を踏まえて（それに拘束されながら）、暮らしの未来を創出するとはどういうことかを考えること、この2点を主たる活動目標とした。

本科目のテーマに即していえば、これから自分たちが生きていく社会をどのような社会

として作り出していくかを考える機会として欲しい、というのがこちらの願いであった。縮小社会化や新自由主義的構造改革が急激に進む激動の中で、持続可能な包摂的社会を創造しそこに生きることこそ、21世紀中葉に向けて、最も重要な「シチズン」の課題だと考えるからである。

そうした課題意識を持ちながら、しかし授業づくりのレベルではまだまだ成熟の域に達するところまでは届いていない。新型コロナ感染症にも大きな影響を受けて様々な制約を蒙った（なんといっても、京北現地での合宿ができなかったことは残念だったが、衣セミが受け入れて下さったことはとても有難かった）が、今年、担当教員の右往左往に文句も言わず付き合ってくれた学生さんたちに、深く謝意を表したい。皆のおかげで、学生さんたちの関心のありようを知ることができたし、産社以外の学生さんたちとの関りは新鮮だったし、その他、今後の授業の洗練に向けた様々な知見を得ることができた。限られた時間を有意義なものとするために効率化に向けて工夫を重ねていきたいと思うし、課題認識を深めてもらうための文献資料の参照などを組み込んで密度を上げていきたいと思う。

もともと、市民参加型のWSを開催することを構想し、その執行委員会の運営に参画することを中心的な活動と想定して、本科目は設計されていた。新型コロナ感染症の収束（コントロールされたwith corona状態でもいいんだけど）が見えない中ではあるが、本来の活動の実現に向けて取り組みを進めていきたいと思う。

これからの人生のために

小辻 寿規 (立命館大学共通教育推進機構准教授)



<担当プロジェクト(G1 クラス)>

- ・草津宿魅力発信プロジェクト
- ・草津ブランド PR 企画実施プロジェクト in 草津ブランド市
- ・学生・若者が動き出す“まちづくり講座”をプロデュース！

まずは、半年間の授業お疲れ様でした。やりきったという方もいれば、まだまだ続くよという方、授業が終わってからも関わるよという方おられると思います。

受講生の中にはコロナ禍以前に大学生活を送ったことがない方もおられました。入学しても授業は非対面、学生のみならず、社会の構成員それぞれが孤立し、孤独を抱える中で自分に何ができるだろうと考え、そのアクションの一つとして「シチズンシップ・スタディーズ」を受講した方もおられると伺ったこともありました。その想いは少しでも叶いましたでしょうか。もし、少しでも叶ったのなら、少しでもそのお手伝いできていたのなら私としては幸いです。

突然の社会の変化は私たちの生き方に大きな変化を与えます。教養科目「地域参加学習入門」や「現代社会とボランティア」で私は、阪神・淡路大震災や東日本大震災が日本に住む大学生のみなさんに大きな変化を与えたことにも触れます。きっとコロナ禍もそのような変化を与えるのだと思っています。でも、生き方の変化は社会の変化だけによるものなのでしょうか。私も社会学の研究者としては普段そのように扱ってしまうことが多くあります。けれども、みなさん、生まれてから今まで生きてきて様々な変化があったはずです。コロナ禍が一番大きな変化であった人もいれば、それ以外で大きな変化があった人もいます。人それぞれです。みなさんの人生にとっての変化はもうありましたか。それともこれからでしょうか。

実は私にも過去にたくさんの生き方の変化があったのですが、その中には阪神・淡路大震災や東日本大震災、そしてコロナ禍も実は含まれません。では、その変化はいつだったのか。一

番大きかったのは祖母の死でした。今でいうところのヤングケアラーのようなことを私も高校時代に少ししていたのですが、その時に祖母が言ったことがあります。「私は入院してもこうして友達が遊びに来てくれる。幸せだ。」この言葉が私の社会的孤立研究の原点となりました。しかし、それが大学への進学動機になったとかそういうことは全くありませんでした。むしろ、家庭環境の変化もあり、大学へは本意入学でした。受講生のみなさんと同じくらいの歳頃何をしていたのか。ボランティア活動をしたり、所属大学には無かった（当時所属の大学には私が興味があった法や経済を学ぶ学部は無かった）学部の学びをしたりをしていました。ずっと今の自分を変えたいともがいていました。もがく中で、人の苦しみや社会の格差を色々と感じ、それが祖母の言葉に、そして今の自分に繋がっていきました。

今回の授業の中でもみなさん、様々なもがきがあったと思います。上手くいかなかったこと、納得いかなかったこと等人それぞれでしょう。だけど、そのもがきはきっとみなさんにとってかけがえのない経験なのです。もがいた中でたくさんの苦しみ、悔しさを経験されたと思います。最終的に良い成果が出ていれば、それは美しい思い出になるでしょう。就職活動ではきっと武器になるでしょう。けれども、成功体験よりももがいたことや失敗の方がきっとみなさんのこれからの人生を助けてくれるものであり、奮い立たせてくれるものであると信じています。他人にはいう必要はありません。自らの中だけに持っていていただき、これからの人生に生かしていただければ幸いです。みなさんのこれからの素晴らしい人生を願って。

試行錯誤の1年目

秋吉 恵 (立命館大学共通教育推進機構教授)

<担当プロジェクト (GV クラス) >

- ・茨木みずとわプロジェクト
- ・FP 茨木 Rits プロジェクト
- ・国際理解教育外国人サポーター派遣事業
- ・発達障がい・不登校・貧困世帯の子どもの支援事業

「シチズンシップ・スタディーズ(CS)」は立命館大学が提供する社会と関わる教養教育科目の中で、地域を活動の場とするサービス・ラーニング科目の主幹をなす科目 CS I として、2012 年から提供されてきた。2020 教養改革によって今年からこの科目の枠組みが、通年科目が秋学期科目に、1 クラス 10 名前後が 30 名上限へと大きく変化した。

さらに今年も昨年に続き、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらの運営となった。リスク管理のため、学生が活動に赴く度に1週間前までに活動計画を提出、大学からの承認を得る。当日、体調管理シートを提出、活動2日後までの体調を確認する。受入先、学生、教職員、センター長、それぞれが、学生が地域で活動するための環境づくりにたくさんの時間を費やした。実際、私が CS 活動におけるリスク管理のためにパソコンに向かった時間は、昨年度に比べて大きく増えた。26名の履修生が15時間以上のボランティア活動を目指した OIC の GV クラスでは、4つのプロジェクト/プログラムによる39回の活動計画を申請し、体調不良や予定変更で中止された4つを除く27回の活動が実施された。

一方、私自身が学生と一緒に地域で活動できた回数は、昨年度と比べて増えていない。活動が行われる平日や週末に都合がつかないことや、対面



(フードパントリー茨木の回収日に寄付者とボランティア)

授業を続けるための体調管理への責任から無理ができないこともある。活動中の受入先との対話への支援や、地域理解のための示唆など、これまで培ってきた現場での教育手法を提供できた学生は全体の2/3程度にとどまり、その回数も昨年度までのように複数回とはいかなかった。授業時間内でのリフレクション支援も、4チームの間を行ったり来たりでは、これまで CS I で心掛けていた深い考察に至るような支援ができない。授業のたびに、学生に地域に申し訳なくて落ち込んだ。

大学生ボランティアを、共に課題を解決する担い手として育てるミッションを持つ受入先は、活動後のリフレクションで、現場で起きたことを捉え直す機会を提供して下さる。でも、そこまでのミッションとそれを実現できる手法を持っている地域団体は多くはない。だからこそ、リフレクションを教員が担う。ボランティア科目ではなくサービス・ラーニング科目を、立命館大学が提供している意味はそこにあると考えてこれまで工夫を重ねてきた。

活動期間が半減し、1クラスの学生数が3倍になった本科目で、コロナ禍でのボランティア活動(サービス)におけるリスク管理と、視野を広げ深い学びに至るリフレクション(ラーニング)をどのように実現するか。本科目2年目の来年も試行錯誤を続けよう。コロナ禍の中、学生たちを受け入れてくださる地域の皆様への感謝と、未来への願いを込めて。